早婚（男は十八才以上、女は十四才以上）すれば報奨され、十人以上の家族には国王から特別手当がでる一方、独身者には高い税金が課された。こうした政策が功を奏し、その後移民はほとんどとだえたにもかかわらず、ニュー・フランスの人口は一六七二年に六千七百人、一七一三年に一万八千人、一七三九年に四万三千人、一七六三年におよそ七万人と、雪だるま式に増えている。そのほとんどが自然増であった。

しかし、それでも、現在のカナダ東岸からアメリカのルイジアナにまで広がっていたニュー・フランス植民地にとって、七万人という人口は少なすぎた。その結果、ニュー・フランスは、圧倒的多数を占める英国植民者に敗れてしまう。

フランスがケベックより先に基地を設けたアケージア地方（現在のノバ・スコシア、ニュー・ブランズウィック、およびメーン〔米〕の諸州を含む）でも、フランス系住民の人口は約一万五千人（一七五〇年推定）にふえた。しかし、アケージアを奪いとった英国は、非忠誠を理由に、彼らをフランスや当時フランス領であったルイジアナ地方に送還してしまう。ルイジアナへ送られた人々は、今でも〝ケイジャン〟と呼ばれて、昔の名残りをとどめている。送還された人々の一部はアケージアへ戻ってきた。

強力なカトリック教会

フランス植民地の大きな特徴は、封建制と重商主義と強力な教会の存在であった。統治は国王が任命した総督と地方長官によって行なわれ、ほとんどの官職はフランスから派遣された役人が占めた。土地は一部のフランス人に与えられ、医者、芸術家、建築家などもフランスから招いた。貿易も母国フランスが独占して、利益はほとんどフランスに持ち帰った。こうして、植民地社会は、フランスからやってきた上層階級（統治者、官僚、荘園経営者、商人など）と、庶民（荘園で働く農民、職人、毛皮猟師など）の二つの階層にはっきりわけられた。

ただ、本国から遠く離れていることもあって、階級制度はそれほど固定されず、また政治的、社会的風土もだんだん独自のものが育っていった。

カトリック教会も、支配階級として、各方面に絶大な権力を握っていた。教会はニュー・フランスにおけるプロテスタント教徒の植民を禁じて、宗教上の独占をまず確立した。ニュー・フランスのカトリック教会は、直接ローマ法王とつながる形をとっていて、その点でも大きい権威をもっていた。カトリック教会は、また教区税や荘園からの収入といった潤沢な資金を利用して、教育を管轄し（ニュー・フランスに教育制度を設立したのはイエズス会であった）、病院などの社会福祉事業を行った。宣教師はときには毛皮貿易の仲介者であり、また弁護士の役割もはたした。このように、カトリック教会は、ニュー・フランス社会の実質的な支配者といってもよいほどの影響力をもっていた。（Y）

カナダ各地にインディアン

カナダには、インディアン語の地名が実に多い。「カナダ」と言う名前自体が、もともとはイロクォイ語だったというのは先に書いたが（本紙第三十八号）、ケベックは、川が狭くなるところ、すなわち河峡という意味のアルゴンキン語、首都オタワは、ヨーロッパ人が初めてやって来た頃、スペリオル湖の近くに住んでいたアルゴンキン種族に属する一族（バンド）の名前に由来する。同様に、トロントは〝集合場所〟を意味するインディアン語がなまったもので、サスカトゥーンは、一帯にふんだんにあった野イチゴを指すクリー語の〝ミッサスカトゥーミナ〟が起源と言われる。

こうしたインディアンの地名が残っているのは当然である。ヨーロッパ人が新大陸に到着するまで、現在のカナダもアメリカ合衆国もインディアンの土地だったからである。

白人が初めてやって来た頃のカナダには、推定二十万のインディアンが全土にまたがって住んでいたと言われる。現在のオンタリオ州南部やケベック州からニューヨークにかけての肥沃な土地には、イロクォイ族やヒューロン族などのいわゆるイロクォイ語族が、トウモロコシ、豆、かぼちゃ、タバコなどを栽培する、農業中心の定住生活を営んでいた。彼らは、複雑な社会・政治組織をもち、十六世紀にモホーク、オネイダ、オノンダガ、カユガ、セネカの各族からなる五族連盟を結成していた。

マニトバ、オンタリオ、ケベック、大西洋沿岸にかけての広大な森林地帯では、クリー族、オジブェ族、ナスカピ族などのアルゴンキン語族が、食糧の獲物を追って移動しながら狩りや漁をして生活していた。カナダにやって来たヨーロッパ人が、初めて接触したのは、このアルゴンキン語族に属するインディアンであった。

カナダ西部の平原には、ブラック・フット、平原クリー、アシンボインなどの部族が住み、野牛（バッファロー）や大鹿（ムース）の狩猟と野生の果実の採取に依存して生計を立てていた。アルゴンキン語族と同じく、これらの部族も獲物を追って各地を転々と動いた。その北の森林地帯では、トナカイ（カリブー）の狩猟によって生活を営むアサパスカン語族が、そしてさらにその北のベーリング海峡からグリーンランドに至る極北地方には、アザラシを食糧とする、エスキモー（アルゴンキン語で〝生肉を食べる人〟のこと。自らは〝人間〟を意味するイヌイットと呼んだ）が住んでいた。

そして太平洋側には、北西部の森林・山岳地帯にポトラッチと言う儀式やトーテムポールで知られるトリンジット、チムシャン、ハイダ、クワキウトル、ヌートカなどの諸族が、また、ブリティッシュ・コロンビア州南部では内陸サリッシュ族、アサパスカン語族などが狩猟や漁労を営んでいた。